

卷 頭 言 — 簡牘研究の今昔 —

「居延漢簡は全部で何枚ありますか」「一万枚余りです」「それならば是非コンピューターを使いなさい」。一九七七年十二月の第三回木簡研究集会で居延漢簡を材料にして帳簿類の報告をした際に、奈文研の現所長田中琢氏と交わした会話である。後に『木簡研究』第五号を見ると、奈文研で丁度コンピューター利用が始まったばかりの時期だったらしい。田中所長は資料持参で熱心に勧めて下さったが、機器に弱い私は、中国の簡牘で果たしてそんなことが出来るだろうかと半信半疑であった。あれから二〇年、簡牘においても有志の献身的な努力によって遅れ馳せながら部分的に電算化が進み、今ではその恩恵に預かっている。キーの操作でほとんど瞬時に検索が可能となり、田中所長の言のごとく文明の利器であることを実感するとともに、隔世の感を禁じ得ない。

簡牘との出会いは一九六一年に遡る。当時ロンドン大学のローウェ博士が来日されたのを機に、京大人文研で森鹿三先生を囲んで居延漢簡の輪読会を再開することになり、その会に院生で参加したのが最初である。そのころの日本の漢簡研究状況は、一九五一年に勞榦氏の釈読した釈文を唯一の手がかりにして「勞氏の成果の上に如何ほどの附加ができるか」（森鹿三「居延漢簡研究序説」）という一抹の不安を抱いて始まった人文研の共同研究「居延漢簡の研究」は、一九五七年に終了していた。ところが皮肉なことに、終了した年に台北から『居延漢簡図版之部』が、また二年後の五九年には北京から『居延漢簡甲編』が出版されたのである。原簡は見られないまでも全簡の写真と、一部の簡については出土地も判明し、研究条件は以前に比べて格段に好転していた。五七年までを研究の第一期とするならば、いわば第二期の幕開きにも相当する時期であった。

輪読会は森、ローウェ博士のほかに藤枝晃、米田賢次郎、大庭脩氏に私でスタートし、後に平岡武夫、町田章氏も加わって

精力的に行われたが、輪読はスムーズに進行したわけではなかった。まず写真が期待したほどに鮮明でなかった。その写真も各簡について『図版』と『甲編』とでは鮮明度に差があり、しかも簡の配列は二つの図版と釈文（上海商務印書館本）の三者全てが異なるという有様で、簡を比較照合するだけでも一苦勞であった。そんな中で文字や熟語の用例調べである。これといった工具類のない当時としては、一万枚の中から捜さねばならなかった。そのために輪読会の大半は、大型の本をあちこち移動させ、本をめくることに終始していたと言っても決して過言ではなかった。しかし、お蔭で簡牘を繰り返し観察することができた。それは単に記事のみならず筆跡、文字の大小、書かれた位置から簡の形や大きさに至るまで考察し、写真という制約はあっても簡牘を“もの”として全体を捉える目を養うことができたのは収穫だったと思っている。

六〇年代とは相違して中国出土の簡牘がすでに四万枚を超える現在では、コンピューターは有用どころか今や必需品である。しかしこと簡牘に関するかぎり、現状ではコンピューター利用を歓迎してばかりはいられない側面のあることを十分に注意しておく必要がある。一つには釈文が固定してしまう危惧である。中国の簡牘でこれが正しいとする釈文は未だ完成していない。ところが一度入力すると余程の努力をしないかぎり、その釈文が独り歩きをしてしまう恐れが多分にある。二つには写真を離れて簡牘研究が行われることの危惧である。それは言わば第一期の研究への逆行であるのみならず、なまじコンピューターがあるために森を見て山を見ざる研究に陥る危険性をはらんでいるからである。これを回避するためには、何よりも簡牘の鮮明な写真の提供が必須である。これは簡牘を見られない日本の立場から言うだけではない。中国の釈読が必ずしも原簡によらず、写真で行われていることも踏まえてのことである。近年の中国公刊の写真は余りにもひど過ぎる。最新の技術を以てすれば、ずっと鮮明な写真が提供できる筈である。そうした鮮明な写真に基づいて画像も含めてデータベース処理にさまざまな工夫をこらし、コンピューターの効果を大ならしめる。これが今後簡牘研究を進展させる途であらう。

（永田 英正）